

## ◆ 論文

# メディアの再帰性

キーワード | メディア, 再帰性, イスラム国

中京大学経営学部教授 中西 眞知子

## 1 はじめに

朝起きると新聞を開く。TVのニュースをつける。パソコンのスイッチをいれてeメールをチェックする。車中では文字ニュースを追いかけて、携帯で新着のヤフーニュースをチェックする。社内の中吊り広告で、雑誌の内容を知り、車窓に目を移すと、さまざまな屋外広告が目に入る。隣の人が持つ紙袋には有名なファッション・ブランド名がそのロゴマークとともに大きくデザインされて目を引く。

現代社会において、メディアは日常生活にいつしか深く入り込んでいる。われわれの生活は、それを意識するかどうかにかかわらず、365日24時間、さまざまなメディアにさらされている。スコット・ラッシュとジョン・アーリは、1990年代に、国家の範囲での社会構造がグローバルな情報通信構造に置き換わりつつあることを示す(Lash and Urry1994:6)。アーリはさらに、創発的な情報システムがさらなる再帰性の基盤となっていること、情報通信の構造的な力の増大に伴って、社会の構造の手がかりがなくなったことを示し、新たな情報通信構造を介して高度な再帰性が生まれているという(Urry2003=2014:209)。

再帰性(Reflexivity)<sup>1</sup>とは、「自らを他者に

映し出して、それが自らに帰って自己を変革するらせん状の循環」である。この概念自体も伝統社会、近代社会、脱近代社会と社会の変化に伴って変化している。社会は、仲間(socio)に由来し、人と人との間の関係、そのなかにメディアも組み込まれている共同過程をさす。社会化とは、個人が他人との相互関与によって、社会の価値や規範を内面化する習得過程を意味する。現代社会では社会化、すなわち規範共有の過程に市場やメディアの再帰性が深く入り込んで、われわれの五感、感情、記憶、行動などの変化を促し、それにともなってメディア自体も変化しているのではないか。

本論では、再帰性の変化とのメディアの変化を追いつき、マスメディアやソーシャルメディアの再帰性について現代社会の変化のなかで論じていこう。

## 2 再帰性の変化

### (1) 再帰性とは何か

アンソニー・ギデンズは、自己意識が他者の理解と不可分に結びついていることを重要なことと考え、個人と社会との循環に焦点を当てる(Giddens 1976:6-27=1987:7-24)。彼は人間の行為と社会構造との循環を構造の二重性と呼ぶ。また、社会学は行為者の意味の枠に構成さ

れた世界を再解釈する二重の解釈学であるという。彼は、再帰性が、社会的、言語的な基盤をもつことに意味を見出す。ギデンズにとって再帰性とは、個人が社会的、言語的な基盤に依拠して、自己を含めた諸対象の意味を再解釈し、構造に条件付けられ、同時に構造に働きかけるらせん状の循環である。

再帰的近代化（reflexive modernization）とはギデンズによれば、「近代の循環を自覚できるようになり、近代の限界や矛盾と折り合いをつけて、近代化そのものを再帰的に問い直すこと」であり、まさに近代化の再帰的な問い直しである。ギデンズは、単純な近代化を、合理的で社会を一直線に富の増大や質の向上へと向かわせるものであるという。これに対して、再帰的近代化を、近代化のもたらす限界、矛盾、困難と折り合いをつけていくものであると区別する（Giddens1994＝2002）。

再帰的近代化が世界全体にもたらした問題として地球環境問題があげられよう。自然現象とも考えられる地球温暖化に対して、1997年のCOP3では先進国が温暖化効果ガス削減条約を結び、2011年のCOP17では米国や中国の条約参加も提唱された。2015年のCOP21は、パリで開催され「パリ協定」が結ばれた。オランダ大統領は、地球温暖化との戦いとテロとの戦いを二つのグローバルな挑戦であると述べる。産業革命以降の世界平均気温上昇を2℃未満にするという目標が盛り込まれた。途上国から相次ぐ気象災害の窮状の訴えに対して、2020年には先進国から途上国へ1000億ドルを支援できるようになるという目標が掲げられた。が、すでに1990年代から貧困層が最悪の影響を受け、第三世界と先進社会との間の先鋭的な国際的分裂となると指摘されてきたように（Lash, Urry 1994：33）、いまだに先進国と途上国の溝は埋まらない。

再帰性には、自己アイデンティティの形成のように、行為者が自己をモニターして自らの意味を問い直し、行為の帰結が自らに作用する自己再帰性がある。現代社会の若者の間で、ラインなどの場面ごとに形成される「キャラ」とも

表現されるような、その場限りの多面的なアイデンティティもある。

また「もったいない」意識の消費行動と賞味期限切れ商品を販売するスーパーの増加や食品メーカーや小売店の賞味期限の延長の関係のように、行為が社会構造に条件付けられ、同時に社会構造に影響を及ぼすような制度的再帰性がある。

「ワークライフバランス」という語がメディアを通して伝わり、「日本の女性の地位が世界で100位以下」という報道がなされて、働く時間の見直しや「女性が輝く社会に」という政府の方針が登場するように、国名、企業名や統計数値の公表が、従来の日本の男女の働き方に変化をもたらすといった例は、認知的再帰性の働きによる。

ニクラス・ルーマンによれば、「メカニズムはそれが自分自身に適用されることにより再帰的になる」（Luhmann 1974＝1989：80）と、自己言及概念を徹底することによって、再帰性が意図しなくても主体にまで及ぶことを示している。

再帰性とは、「自己を他者に映し出し、それが自己に帰って自己を変革するらせん状の循環」ということができる。再帰性は多くの領域で働き、異なる次元を結びつける。

## （2）情報化社会における再帰性の変化と新たな展開

ウルリッヒ・ベック、ギデンズ、スコット・ラッシュの3人は1994年に再帰的近代化をめぐる論争を行った。ベックは、リフレクション（reflection）を「近代化における自己省察」という認知的な再帰性であり、再帰性（reflexivity）を「産業社会からリスク社会への望まれない、目に見えぬ変化」とであると区別する。彼は、再帰的近代化をリスク社会のもたらす結果に対する自己対峙であるととらえる。

一方ラッシュは、ベックやギデンズの再帰性を認知的で制度的なもので、それだけでは脱組織化して情報化や市場化の進む社会をとらえきれないと批判する。ラッシュは、情報コミュニ

ケーション構造を流れていくものが知だけではなく模倣的象徴でもあることから、美的再帰性の可能性が開かれるという。美的再帰性とは、非概念的な模倣的象徴やイメージに媒介された再帰性で、対話は「私」の美的な表現である。美的再帰性は、啓蒙思想ではなく芸術における近代化の中に見出すことができる。

ラッシュは、後期近代の共同体回帰の基盤を解明しようとして、共有された意味に基づく解釈学的再帰性を提唱する。解釈学的再帰性とは、共有された意味や慣習に媒介された再帰性で、対話は「われわれ」の共有された意味に基づいた沈黙である。彼は、再帰的共同体とも表現する。「空気」とも表現されるように、日本人には「黙っていても伝わるもの」を容易に理解することができるであろう。

さらに、グローバルな情報社会において、ラッシュは、意味の形成とはインターネットなどを通じたコミュニケーションになることを示し、知が他者との相互反映性において行動に結びつく現象学的再帰性に着目する。知は活動や表現に再帰されてそれらに具現し、両者の間には距離がなくなる。

最近、アンソニー・エリオットは「今欲しい」という消費主義が、自己を無限に変えられるというファンタジーを促進するものであり、再創造できないものはないと主張する。自己再創造への休むことのない強調が「次回」を求める文化となるというのだ（Elliot 2009=2010）。「次回」の消費によって、アイデンティティであっても、容貌であっても無限に自己を変えられるという幻想を媒介として、新たな消費を促すことになる、消費再帰性を見出す。

小川葉子は、グローバルな再帰性を、ハイパー再帰性としてとらえる（小川 2007）（小川ほか 2010）。ハイパー再帰性とは、持続可能性と非線形性の集合的生命の二重らせんの時間概念を結合させる核として位置づけられる。それは、ブランドやメディアコンテンツの消費過程において、ナラティブとリスクをめぐるらせん状に入り組んでいる。彼女は、フェア・トレードなどをめぐるメディア言説においては、人々の

歴史や時間が介入して語られているという。小川はこのように、創発性、リスク回避性、自ら変革可能性などを備えたハイパー再帰性の働きを見出す。

情報化や市場化の進む社会では、市場が無自覚のままに人間の味覚、視覚、聴覚、嗅覚、触覚などの五感などに浸透して変化を促し、自らも変化と蓄積を続けることになる。さらに五感のみのとどまらず、感情、記憶、行動などがグローバルな市場と再帰的に変化することになる。このように、われわれを媒介として、市場が生成、変化、蓄積していく再帰性を筆者は新しい市場再帰性と呼んだ（中西 2013, 2014）。

社会の変化を映し出して再帰性の性格は変化し、領域が拡大する。今後の急激な社会の変化に伴って、現在とは異なる再帰性の働き、新たな再帰的近代化の可能性が期待される。

情報化社会としての現代社会においては、市場におけるのと同様、メディアにおいても再帰性が働くことが想像されよう。制度的再帰性や認知的再帰性に加えて、美的再帰性や解釈学的再帰性、現象学的再帰性などが働くであろう。さらに、消費再帰性やハイパー再帰性、新しい市場再帰性なども盛んに働くことが想定される。

### 3 メディアの変化

次に、社会の変化に伴うメディアの変化を追ってこよう。

#### (1) 印刷技術と新聞

新聞成立の前提条件として、15世紀のグーテンベルグによる印刷技術の発明があげられる（吉見 2012：107-122）。16世紀以降、ドイツなど欧州で印刷物が流通するようになる。当時の欧州では、社会を流れる情報の拡大、加速があり、その動きを印刷メディアが増幅していったと彼はいう。当時は、コーヒーハウスで新聞やパンフレットを自由に読むことができて、客の間では、激しい政治的議論が行なわれた。コーヒーハウスは近代ジャーナリズムの公共的基盤であり、新聞閲覧所ならびに展覧会場としての

性格もあった。このように支配階級のものであった公共性が、新聞を通して市民階級の側に移る。英国ではブルジョアジーの政治関心を基盤とした日刊新聞と、ブロードサイド・バラッドという大衆新聞の二つの系列があったという。日本の明治期においても、国家や政治を中心的なテーマとした大新聞と、総ふりがな付きの小新聞や江戸時代からの瓦版が混在していたということだ。新聞にはブルジョア市民階級による政治論議や批判、経済情報を柱とするものと、中世以来の民主の口承的なコミュニケーションの延長上に位置づけられるものの二つの源流があるという。

印刷技術の発達とともに、口承文化が活字文化に置き換わられていくことにより、新聞が成立することになった。技術イノベーションの変化とメディアの成立、それに伴う階層の変化が密接に関連することがわかる。

## (2) ラジオからテレビへ

1920年代には、電話が、「パーソナルメディア」として確立していったのに対して、ラジオは「マスメディア」として組織化されていった(吉見 2012: 159-174)。1920年代以前はラジオと電話の境界線はそれほど明瞭ではなく、「無線電話」と呼ばれるアマチュア無線形のネットワークであったという。それ以後、受信と送信の両方が可能であったメディアは、送信は放送局、受信は大衆というメディアに転換していく。ラジオの概念が相互媒介的なメディアから大衆の嗜好に合うように調整し商品化される放送局と、商品化された言語活動を消費していく、受け手としての大衆を両極する関係を再生産していくメディアへと転換していったという。都市のブルジョアジーを主たる聴衆としたクラシック音楽やオペラなどの娯楽から、一般大衆を聴衆としたカントリー・ミュージックやボクシング、野球中継などに広がり、ラジオは急速に地域メディアから全国メディアとなっていく。

テレビが、動く映像を送信する技術として登場するのも1980年代後半である(吉見 2012: 175-190)。1950年代、60年代には、欧米や日

本においてテレビが爆発的な勢いで普及する。

日本では、1953年に街頭テレビが始まる。1959年の皇太子成婚があり、電気洗濯機、電気冷蔵庫と共に、家電の三種神器のひとつとして普及していく。家電の広告には家庭の主婦が主体性を発揮して登場する。テレビは家庭の居間にナショナルな広がりを持った時間割を挿入したといわれる。1960年代にテレビが全日放送となり、これと並行して、「東芝日曜劇場」「夢で逢いましょう」「肝っ玉かあさん」など、ナショナルで大衆的な性格をもったプログラムがゴールデンアワーに用意されるようになる。

技術的イノベーションによるラジオからテレビへの転換と急激な普及は、家庭のなかに直接社会や国家のできごとを持ち込むことになる。音や映像によって、同じものを同じ時間に全国どこでも視聴して楽しむという、共通の情報や娯楽を広めていくマス・メディアの定着につながるものと考えられる。

## (3) ウォークマンから携帯、インターネットへ

アースは、音響発明がクラシック音楽の音質向上に加えて、ポップミュージックの発明を後押ししたことを指摘する(Urry 2000=2006: 139-186)。彼は、ソニーのウォークマンを新たなポストモダンのサウンドスコープの偶像と位置づける。どこへでも移動可能な人体の一部として音が持ち運ばれるため、公共の場であっても私的な音の空間を構成することができるようになった。吉見によれば、1990年代、ウォークマンによって、メディアを通して、共通な風景をばらばらに再構築していく可能性が示されたと(吉見 2012: 200-201)彼はチェンバースを援用して、移動し続ける身体が公共的にデザインされ、配置された都市のなかで、独自の風景と時間空間を組織した可能性を開いたと論じる。

またアイポッドなどによって音楽の選択可能性が広がることによって、聴覚も、ジャンルを超えて、より多様な音楽を受容する聴覚へと変化する。最近では、スマートフォンやタブレットと無線で接続するワイヤレススピーカーで、持

ち運びやすさや野外での使いやすさを工夫した新商品が増えているという（日本経済新聞、2012、10、30）。手持ちの携帯端末から音楽を送って、そのときどきの好みの音楽を本格的な響きで楽しめる。時や場所を選ばず、ジャンルを問わずに多様な音楽市場の提供するさまざまな聴きたい音楽を求めるようになり、それに応えるイノベーションが生まれるという変化が続く。

1990年代には、携帯電話の爆発的な拡大がある。携帯電話によって、公共空間と私的空間の境目がなくなることが指摘される（吉見2012：204-211）。さらに彼は、スマートフォンが普及することによって、脱場所化、非同期が進み、双方向的な自己編集が行なわれるようになるという。今日の資本集積は新たな情報技術を駆使して文化を編集し、自己イメージを自在に操作していく能動的、主体的な行為者によってなされることになるという。新しいメディアを消費していったのは、地球上のさまざまな場所で脱場所的、脱文脈的に浮遊し始めた消費者たちのフローという身体であるという。

史上初のコンピュータは1945年米陸軍とペンシルヴァニア大学のチームによって完成させた軍事目的のENIACである（吉見：213-233）。このENIAC開発に参加したノイマンによって、プログラム内蔵方式のコンピュータ技術の基礎が築かれたという。なお、このENIACは1939年に開発されたアイオワ州立大のABCマシンをモデルとしたという説もある。1970年代から1980年代には大型コンピュータから小型のパーソナルコンピュータに変わり、大量生産がなされるようになる。

1990年代には、インターネットの時代が始まる。インターネットの始まりは、1969年に米国防省が、スポンサーとなって、4つの大学や研究機関を結んだARPANETという学術的なパケット交換網であった。その後、多くの商業的なネットが参入し、Windows95,98のようなインターネットを容易に接続するソフトが売りだされ、爆発的に世界に広がる。また市民運動や対抗的文化にパソコン通信を活用していく動きも盛んになり、ネットワーク文化の流れを

形成する。米国では環境運動、消費者運動、反戦運動、フェミニズムなど草の根運動とコンピューター文化が不可分に絡まりあってきたという。

一方、日本では、パソコンもインターネットも、市民からというよりも、企業の利益追求、広告イメージを通じた欲望喚起を目的として普及が進められた。が、1995年の阪神・淡路大震災や2011年の東日本大震災においては被災地の状況の「情報ボランティア」の役割を果たすことになる。政治においても市民ネットワークを背景にした知事誕生にも結びついた。

「アラブの春」と呼ばれる2010年から2011年にかけて中東全域でおきた大規模な民主化運動においても、ツイッター、フェイスブックなどのインターネットに媒介されたソーシャル・メディアが決定的な役割を果たしている。

吉見は、パソコンやインターネットが地域やグループの異なる人を横断して情報を共有させ、迅速かつ正確に情報の変改に対応すること、新しい運動を担うのが組織ではなく個人であること、インターネットを通じたネットワークがローカルなものであると共にグローバルなものであることを、インターネット社会の新たな特徴として指摘する。

吉見が指摘するような情報横断的な共有制や個人が主役となること、グローバル性に加えて、インターネットは、新しい公共性を生成する。吉田純（吉田1999）は、インターネット空間自体が、自己言及的、自己反省的に討議のテーマとして主題化されたという。インターネット空間における公共性の本質は自己言及＝自己反省の二重化という点に求められるとして、インターネット空間が、曖昧さを携えながらも新しい意味での公共性を築き始めていることを示す。吉田は、現代の公共圏を自己言及的社会空間であると表現している。吉田は、ハバーマス流の平等性、公開性、自律性という公共性に理念型に対して、ネットワーク社会においては、理念型への接近と離反の相反する現象が見られるという。理念型への接近としては、第一に平等性については、インターネット空間が、既存

の社会的属性、社会関係から自由な、参加とコミュニケーションを許容する空間で、第二に、公開性については、原理的には公開性を確保していて、インターネット空間が持つネットワーク性は、公開性を拡大する可能性を持つという。第三に、自律性については、現代の自律性の基礎は、自己言及性にあるという。インターネット空間は、ネットワーク性をさらに促進する方向で規範形成を行うことにより、より高い自律性を実現することができるという。情報ネットワーク化の進む社会において、インターネット空間は、従来型の平等性、公開性、自律性という公共性概念に接近しつつ相反するという、両義的で曖昧な距離をとっている。其の領域における格差の拡大を指摘する公文俊平は、インターネット空間が自律性を強調する反面、平等性を覆しつつあることを示唆する（公文2004）。公文はさらに、情報化社会の運営においては、ベキ法則はいたるところで発現することが不可避の現実であるとみなす。そしてそれが生み出す不均等効果を除去、軽減するのではなく、積極的に容認して利用すること、特に智のゲームについては、それを社会的に正当な活動と承認して、その結果として生まれる智の配分の集中度の高いベキ分布を当面はいっさい規制しないことを提唱する。

インターネット空間における新しい公共性とは、その新しい市場性と公共性が対立せず同時成立するもので、平等性よりも自律性に重きを置いた、コミュニケーション空間としての期待をかなえる特性で、インターネットの再帰的な特性と関連する（中西2007）。ネットワークの経済性追求に求められていた創造性と透明性の追求が実現されやすい空間ともいうことができよう。インターネット空間は、従来型の公共性概念から、平等性を弱め、自律性を自己言及性、再帰性に近い形で受け継ぎ、より強化したものとなる。それは、新しい市場性と公共性が同じ空間で成立しているという曖昧な空間でもある。インターネット空間の市場性と公共性は、自律的で再帰的なかわり方次第で、市場にも公共空間にもなり得るという両義的で

もある。再帰性を促進する循環の中で、インターネット空間は、そこにコミュニケーションの場を求め、積極的にかかわる者にとっては、さまざまな可能性に開かれるもので、また、その再帰性を自覚しているものには、加速度的にプラスの循環に入っていくことが可能である。インターネットのありかたは、再帰的近代を生きる私たちの、新しい時代の、知識、制度、政策のあり方という面でも示唆するところが多い。

どこへでも移動可能で、空間を横断して、情報を共有し個人と個人をつないでいくメディアとしてのスマートフォンやインターネットというイノベーションの普及によって、平等性、公開性、自立性などから構成されていた公共性などの従来からの概念やその実践としての政治や社会運動が、再帰的に問い直され、変革されていくことになる。

#### （4）グローバル・メディア

前節で、インターネットを通じたネットワークが、グローバルであると共にローカルであること、すなわちグローバルなものへと変化してきたことを示した。ロバートソンは、グローバル性が近代化の条件でない以上に原因ではないと主張し、地球化するとともに地方化する「グローカリゼーション」を唱え、グローバルに考え、ローカルに行動することを提唱する（Robertson 1992 = 1997）。彼は、再帰的近代化の中でグローバルとローカルの循環を促し、グローバリゼーションの一方向化への抵抗を試みようとする。

また、トムリンソンは、グローバル性自体が、無秩序で非組織的で「非方向的」なものであり、グローバリゼーションには終点というものがないという（Tomlinson 1999 = 2000 : 87）。これは、ギデنزがグローバリゼーションの定義として「抽象的」であることや、「目の前にあるものとなないものとの交差」「遠く離れた行為」（Giddens 1994A : 4）や「時間と空間の分離」（Giddens 1990 = 1993）と示しているものと重なる。グローバリゼーションとは、終わりが無いという意味で再帰性の徹底した現象の一つと

考えられる（中西 2007）。

メディアはグローバリゼーションをより促進すると同時に、グローバルとローカルを結びつけるという働きも行なって、グローバルとローカルの再帰的循環に拍車をかける。

9.11 のできごとは、グローバリゼーションが進む社会に大きな衝撃を与えた。この事件はニューヨーク国際貿易ビルの映像が世界で同時に放映されることによって、そのイメージはより強烈なものとなり、記憶に残った。また、このころ、CNN、BBC など欧米のメジャーな放送局だけでなくカタールの放送局であるアルジャジーラからの映像が注目を集めるようになる。カタールは裕福な国であるが、その理由の一端に、日本（中部電力など）が天然ガスを工学で購入していることがあるという（高橋和夫 2015：144）2014 年には、トルコでは、シラクの反体制派やクルド武装組織など、中東から欧州まで前部で 800 チャンネル近い放送が受信できた（内藤正典 2015：100）。吉見はアルジャジーラの台頭によって CNN、BBC など欧米のグローバルメディアの世界性が、中東からのメディアによって問い直されていることが重要であるという（吉見 2012）。誰が送り手となるかによって、今われわれに何が起きているかという世界の事実が異なってくるのである。

このようなメディアの重層構造は、政府や放送局だけでなく、インターネットを通じた市民の側からの発信も加わって、より多様化する。

2010 年から 2011 年にかけての中東における民主化革命では、インターネットによるソーシャル・メディアが重要な役割を果たし、「アラブの春」と呼ばれる現象が起きた。兼子論によれば、アレクザンダーはこのエジプト革命を「生きるドラマ」と表現し、革命側がムバラク体制を俗化、革命を聖化するのに対し、ムバラク側は革命側を秩序を乱す俗的存在とし、現体制を聖化したという（兼子 2014）。兼子は、ハーバースが感情的な抑制を求める討議を公共圏における理念的コミュニケーションとするのに対し、アレクザンダーは聖／俗という二項対立によって正しさを感情的に訴えるパフォーマンス

スの舞台、すなわち市民圏としての性格を公共圏が持つという。さらに彼は、メディア上でのパフォーマンスの主題となることで、政治がイベントとなり、オーディエンスとしての市民の共振に訴えることを余儀なくされることになるという。

きわめて西欧的といえるハーバース流の個人主義的で合理的な公共性が、インターネットの普及によって、より平等性を弱め、自律性を増したものと変化した。さらにグローバル・メディアが西欧先進社会以外のさまざまなところに広がることによって、アジア的、アラブ的な集合的な、感情的な共感をも含んで選択が決定される市民圏へと変化するということになるというであろう。

#### 4 新しいメディア再帰性

前述したように、グローバルな「複雑性」について論じているアーリによれば、新たな情報通信構造を介して高度な再帰性が生まれている（Urry 2003＝2014：209-211）。個人とシステムは近代化の副作用を再帰的にモニタリングしているというが、この再帰性は認知的であると同時に文化的なものでもある。再帰的近代化には、近代の副作用のモニタリングや組織的対処、改変を可能にする科学システムや専門化システムの問題だけでなく、巨大で新たな文化産業、記号経済をもたらす審美的表現システムが伴う。コスモポリタリズムは創発的なグローバルな複雑性のなかで文化的な再帰性を有する傾向にある。再帰的近代化が見せている形式は、コスモポリタリズムのグローバルな流動である。国家社会からグローバルな流動体の力の増大する社会への移行、近代から再帰的近代化への移行のなかで、複雑性理論が、それ自体不可逆的なグローバルな複雑性の創発的システムの一部になっているという。

1 章でラッシュが「現象学的再帰性」と表現し、ここでアーリが「不可逆的なグローバル複雑性の創発システムの一部」と表現するように、情報化は高度で創発的、非方向的で、際限ない

複雑性は、複雑化をより複雑化していくように再帰性を次々に働かせていくと考えられる。

さらに、新しい市場再帰性と同じように、メディアがわれわれを媒介として生成、変化、蓄積していく「メディア再帰性」とでも呼ぶべき

再帰性が働いているのではなかろうか。新しいメディア再帰性とは、新しい市場再帰性の場合と同様、メディアがわれわれを媒介として変化し、グローバルな複雑性に創発されて、虚構世界と現実世界の区別なく次々に変化を促してい

表1 再帰性の種類と特徴

再帰性の種類	提唱者	特性	社会的時代的背景
自己再帰性 (self reflexivity)	ギデンズ, ベック	行為者が自己をモニターして自らの意味を再審したり、行為の帰結が行為者自らに作用する再帰性	後期近代, 高度近代社会
制度的再帰性 (institutional reflexivity)	ギデンズ, ベック	行為が構造に条件付けられつつ、構造に帰結をもたらすという行為と構造が相互に作用しあう再帰性	後期近代, 高度近代社会
認知的再帰性 (cognitive reflexivity)	ギデンズ, ベック	概念的言語的なものに媒介された再帰性	後期近代, 高度近代社会
再帰性, 自己言及性 (self reference)	ルーマン	再帰のメカニズムが自分自身に適用される自己言及性	後期近代社会
集合的再帰性 (collective reflexivity)	ラッシュ, アーリ	集団主義に媒介された再帰性	近代日本社会（プレ近代社会から続く）
実践的再帰性 (practical reflexivity)	ラッシュ, アーリ	専門的技能を基盤にした伝統的職人技に媒介された再帰性	近代独社会（伝統的協働社会から続く）
言説的再帰性 (discursive reflexivity)	ラッシュ, アーリ	知的な情報処理によって媒介された再帰性	近代英米社会
美的再帰性 (aesthetic reflexivity)	ラッシュ, アーリ	非概念的な模倣的象徴やイメージに媒介された再帰性	脱組織化したポスト近代の情報社会
解釈学的再帰性 (hermeneutic reflexivity)	ラッシュ, アーリ	共有された意味や慣習に媒介された再帰性	脱組織化したポスト近代の情報社会
現象学的再帰性 (phenomenological reflexivity)	ラッシュ	知が他者との相互反映性において行動に結びつく再帰性	グローバル情報社会
消費再帰性 (consuming reflexivity)	エリオット	消費による幻想を媒介とした自己再創造と商品再創造の循環という再帰性	消費社会
ハイパー再帰性 (hyper-reflexivity)	小川	創発性, リスク回避性, システム変更志向性を備えたコミュニケーション戦略によって可能になり、持続可能性と非線形の二重螺旋の時間性の核となるグローバルな再帰性	グローバル社会
新しい市場再帰性 (market reflexivity)	筆者(ラッシュ, アーリらの示唆による)	市場がわれわれを媒介として再帰的に変化し、蓄積していく再帰性再帰性が自ら変化	新しい市場社会
新しいメディア再帰性 (media reflexivity)	筆者(ラッシュ, アーリらの示唆による)	メディアがわれわれを媒介として再帰的に変化, グローバルな複雑性に創発されて虚構現実の区別なく変化を促す再帰性	新しい情報社会



く再帰性ではないか。新しいメディア再帰性は、内向きにはわれわれの五感、感情、価値、感動、価値、思想などすべての社会や文化の変化を促す。同時に外向きには情報資本の再帰的蓄積となり、グローバルなメディア資本主義を促進して、さまざまな方向へと社会の変化を促し続けるものではないだろうか（表1参照）。

## 5 事例 イスラム国

ここで、2015年1月に日本人の人質事件でわが国でも非常に大きな関心を集めたイスラム国（IS）のメディアを取り上げてみよう。

### (1) イスラム国の成立と起源

イスラム国がイラクの主要都市を制圧して独立国家を宣言したのは、2014年6月29日である（池内恵 2015：12-16、国枝昌樹 2015：14-35、Napoleoni2014=2014：8-11）。「イラク・大シリア・イスラム国」（ISIS）「イラク・レバントのイスラム国」（ISIL）と名乗っていたイスラム教スンニ派の過激派武装グループが名称をイスラム国（IS）と改称し、独立国家として、アグ・バクル・アル＝バグディが、カリフ<sup>2</sup>に就任して、カリフ国家を建設した。

イスラム国は、イラクとシリアの反体制過激派のひとつとして2011年から武力闘争を継続し、2014年になって一気に支配地域を拡大し、首都を古都ラッカ（人口40万人）に定めて、行政までも行い始めた。近代から現代にかけて、一つのダーム・アル＝イスラムというイスラム国家であったところが、西欧に植民地化されて国境線で分割された（中田考 2015：154-159）。ナポリオーニによれば、イスラム国はタリバンやアルカイダとは異なり、英仏などの線引きした中東の地図を書き換えている（Napoleoni2014=2014：24-34）。1916年にオスマン帝国の領土分割を取り決めたサイクス＝ピコ協定で定められた国境線を破壊しつつある。中東の民族、宗教問題の原点は、民族や宗教の分布に関係なく英仏が利害関係を元に国境線を引いたこのサイクス＝ピコ協定と、

1917年にシオニストにパレスチナを与えたパレフォア宣言にあるという（内藤 2015：166-174）。彼は、世界中のどこにいてもイスラム国の一員になることが可能で、どんなにイスラム国のプロパガンダを追い込んでもwwwからは締め出すことができないという。

イスラム国の起源は1990年代なかばのアフガニスタンにおける紛争である（国枝 2015：21-37、Napoleoni2014=2014：44-61）。1978年に共産主義政権が発足すると、反ソ、反政府勢力として「ムジャヒディーン」（聖戦の戦士）と名乗る多くのイスラム過激派が結成され、そのなかに、9.11の首謀者となるウサマ・ビン・ラディン等のアルカイダ系グループもあった。1996年にパキスタンを支援するイスラム過激派のタリバンがアフガニスタンの政権を掌握する。この時代にビン・ラディンに反旗を翻したアブ・ムサブ・アル＝ザルカウィが、「タウヒードとジハード<sup>3</sup>集団」を結成し、これが今日のイスラム国のルーツとなる。タウヒードとは神の唯一性を意味するイスラム教の根本をなす教義で、宇宙のすべてのものはみな平等であり他と関係するという認識である。ザルカウィはその後、イラクの聖戦アルカイダ組織の指導者となる。残虐性とインターネットの活用がイスラム国の先がけとなる。その後、「アラブの春」による独裁政権の崩壊、民主化がクーデターや内戦を招き、シリアの内戦を通じて組織を再編成し勢力を拡大していったのが「イラク・イスラム国」である。「イラク・イスラム国」は、外部からの志願者を歓迎し、メディアを巧みに活用して国外における知名度を高めた。バグディは「イラク・大シリア・イスラム国」（ISIS）「イラク・レバントのイスラム国」（ISIL）と宣言する。

ナポリオーニによれば、イスラム国というテロ国家形成の原因として、長いスパンでは旧宗主国による中東の分断、短いスパンではイラクへの予防的攻撃とシリア内戦があげられる。彼女は、グローバリゼーションが人々を独裁体制の安定から脅かす結果となったという（Napoleoni2014=2014：154-164）。シリアに

おける「アラブの春」に対する弾圧とイラクのスニ派の運動が真空地帯を生みだし、そこに武装集団が入り込んだ。グローバリゼーションと貧困の組み合わせが地域を不安定化し、宗派間の部族闘争を激化させたという。

## (2) イスラム国のメディア

ナポリターナは、イスラム国がグローバリゼーションとテクノロジーが急速に変化する世界において、プロパガンダとテクノロジーが重要な役割を果たすことを見抜いているという。さらに彼女はイスラム国の目覚ましい成果の鍵に人質を商品化するマーケットなどテロ・ビジネスによる収入源の確保の速さを指摘する(Napoleoni2014=2014: 64-84)。ナポリターナは、バグダディが米国からプロパガンダの手段と技術を拝借し、米国がザルカウィにまつわる神話をプロパガンダ技術を駆使して世界に撒き散らしたのと同じやり方で、中東の地図を書き換え、カリフ国家を目指しているという(Napoleoni2014=2014: 104-122)。米国はイラク侵攻を正当化する根拠として、サダム・フセインとアルカイダのつながりにザルカウィがいるという神話をこしらえあげた。この「ザルカウィ神話」の創作の成功要因としてメディアの力をあげる。10年後には、イスラム国がソーシャル・メディアを駆使してイスラム国の新しい神話を広めている。バグダディは、今日のバーチャルライフの重みを理解していて、テロに対する現代人の不合理な反応をわきまえて恐怖の予言を拡散すべく、ソーシャル・メディアの活用エネルギーを投じた。人々が衝撃を追求し、できごとの真の意味がおろそかにされがちなことを知り尽くしている。カリフ国家の内外でプロパガンダ・マシンを稼働し続け、若者に「強大な常に勝利する集団」という神話を送りこんで、プロパガンダによって人々の目を欺く。2003年には大手メディアが、ザルカウィが「スーパーテロリスト」とであるという米政府の神話を報道した。これと同様に、10年後にはソーシャル・メディアがバグダディとその武装勢力の実力を意図的に誇張した情報の宣伝と

定着を行ない、自己実現しかねない予言をが広めていく。ISISはアラビア語のツイッター・アプリでも大成功を収めている。

イスラム国は、かつて米国がマスメディアを使ってイラク攻撃のためにプロパガンダを用いたことを模倣して、強力なカリフ国家のプロパガンダを、ソーシャル・メディアを用いることで、欧米に対して返しているということが出来る。意識されているか否かにかかわらず、虚構世界と現実世界の区別なく再帰的に次々に変化を促していくメディア再帰性の働きによるところが大きいであろう。

池内は、イスラム国のドラマの台本がよくできているという(池内2015: 18-19)。現実を忘れようとするアラブ世界の民衆に、現在進行形で双方向性を持たせた「実写版・カリフ制」の大河ドラマを提供したイスラム国は、「インターネット空間に没頭し、リアルとヴァーチャルの境目を曖昧にした現代人の想像力と感情に訴えかけ、国民国家の境界を超越しようと夢見る反近代、反欧米の感情」を刺激したと表現する。池内によれば、イスラム国とは、アラブの春によって陰りがみえたアルカイダのブランドイメージの別ブランドの展開、あるいは「再ブランド化」であるともいう(池内2015: 52-53)。

バグダディは、本物の国家というイメージを植えつけ、ムスリムの間で正当性を確立するために、全世界を対象に洗練されたプロパガンダを展開し、新しいカリフとして正規軍を思わせる映像を公開している。このプロパガンダの威力を借りて、欧米、アジア、北アフリカ、オーストラリア、ニュージーランドからも志願兵を呼び込むことに成功している。イスラム国の広報宣伝は洗練されていて、ソーシャル・メディアを使って広く人材をリクルートしている。イスラム国には、80国以上から15000人以上の戦闘員が参加している。インターネットの呼びかけなどによって増加し続けるイスラム国の外国人戦闘員で最も多いのは、チュニジアから(3000人)で、これは2010年12月に「アラブの春」がチュニジアから始まったことに関

係するという（国枝 2015：116-146）。「ジャスミン革命」とも呼ばれた若者を中心とする民衆蜂起には、フェイスブックやツイッターなどの SNS が駆使されて、ベンアリ大統領の独裁政府は打倒される。この結果、宗教色の薄いチュニジアの独裁政権によって、反体制の政治犯として弾圧されていたイスラム主義者が社会復帰したこと、若者の就職難やジャスミン革命後の心の空白などが、こういった背景にあるという。

池内はイスラム国の報道においてアラブ諸国の外国人戦闘員のほうが多いのに、欧米諸国出身者に注目が集まる理由の一つに、イスラム国がその宣伝の文書で欧米出身者の存在を強調していることをあげる（池内 2015：152-160）。国際メディア空間において欧米メディアの影響力が大きく、特に中東に関する政策を主導するのも欧米諸国である。イスラム国に欧米の出身者がいることによって欧米の関心が高まり、国際政治の最重要課題となる。まさにイスラム国にとって望ましいメディア効果が達成されている。

さらに池内は、斬首による処刑の場면을映像に撮影するという手法がイスラム教徒から好感をもたれないにもかかわらず、映像を公開するのは、その宣伝効果、威嚇効果が負の側面を上回るという緻密な計算と演出があることに注目する（池内 2015：23-28）。イスラム国は欧米向けとイラク、シリア国内やアラブ諸国向けとでは、処刑様式や情報発信の方法を使い分けている。バグダディは 2005 年から 2009 年に米軍の捕虜集要所「キャンプブッカ」に拘束された経験を持つ。人質がオレンジ色の囚人服を着せられていることは、米国の不正に対する復讐という主張で、オレンジ色の囚人服の人質の殺害と映像公開は、イスラム国のアイデンティティである（池内 2015：176-183）。この映像場面では今にも切るという瞬間に場面が暗転して再び明かりが戻ってくると、屍体が横たわっている。「その瞬間」を映さず聴衆に想像させるのは、演劇的な手法であるという。イスラム国の殺害映像はテレビドラマ並みに鮮明で洗練された映像で、演技されているように処刑が行なわ

れるため、インターネット上で世界の人々がうっかり見てしまったり、享受してしまう可能性を高めるという。アル＝ハヤート・メディア・センターは、そのほか、住民の食糧を配給する善政、植民地主義によって引かれた恣意的な国境が問題だとする民族主義思想を踏まえたイラク・シリア国境線上の障害物の破壊、ドイツから渡航した若者の横顔ドキュメンタリー、市井の人がイスラム国の支配で得られた安定やイスラム法遵守による心の平安を語る場面など、プロパガンダ映像の表現と趣向が多彩であることが指摘される。

### （3）イスラムの近代化

ナポリオーニは 2009 年のツイッターを通じて「緑の革命」、2011 年のカイロのフェイスブックを通じた「アラブの春」、2012 年の米国のユウチューブを用いた「ウォール街を占拠せよ」、2014 年香港のブルートゥースによる「雨傘革命」などソーシャル・メディアを活用した社会運動が次々に起きているが、現在のイスラム国ほど成功していないことを指摘している。（Napoleoni 2014＝2014：166-170）。彼女は、「アラブの春」の自主的なスマートフォン蜂起の失敗に対して、イスラム国のプロフェッショナルエリートによるソーシャル・メディアの活用と命令統率を対比する。そして、第三の道として教育、知識、変化の早い政治環境に対する理解が必要とされることを示す。池内は、インターネット上の『ダービク』などによる終末論が展開されていて、イスラム国のグローバル・ジハード運動が、個々の環境や紛争に適応して土着化し、地域に根を張る傾向をもつことを指摘している（池内 2015：184-203）。イラクでの反米武装闘争以来、終末戦争は始まっていて、イスラム国は自らの勢力拡大は神兆であると論じている。池内は、2014 年のイスラム国の急展開を、1952 年のナセルのクーデター、1979 年のイラン革命、1991 年の湾岸戦争と米国の覇権に対抗する武力ジハード、2001 年の 9・11 とブッシュ政権によるタリバン政権と 2003 年のイラクのフセイン政権の打倒、2011 年のアラブの春を

引き金とした政権の崩壊や動揺といった過去の複数の分水嶺において胚胎されていたものが重なって現実化した新たな分水嶺であるにとらえる（池内 2015：206-225）。内藤は、イスラムの民主化を進めたトルコの例から、イスラムと西洋化は折り合わないことを確信している（内藤 2015：200-209）。

イスラム圏では、西欧的な近代化や民主主義をそのまま持ち込むのではなく、イスラムの地域に根ざした独自の文化や宗教を反映し、イスラムに対して再帰的な近代化が求められるというであろう。

#### （4）日本人人質事件

2015 年 1 月から 2 月、日本人を人質にとって身代金やヨルダンの拘束された女性テロリストの釈放を要求して、最終的に殺害した事件が起きた（朝日新聞 2015 年 1 月 21 日-2 月 26 日）。2014 年 8 月 16 日、湯川遙菜さんがシリアで拘束される。11 月下旬にイスラム国関係者から後藤健二さんの妻に、後藤さんを拘束したというメールが届く。2015 年 1 月上旬に 1500 万ユーロの身代金要求メールが届いた。1 月 16 日に阿部首相が中東外遊に出発、17 日にカイロで、ISIL と戦う周辺各国に 2 億ドルの支援を表明する。20 日にイスラム国が湯川さんと後藤さん 2 人の殺害を予告し 2 億ドルの身代金を要求する映像を流す。24 日に湯川さん殺害映像が公開され、身代金ではなくサジダ・リシャウィ死刑囚の釈放を要求する。27 日に残された時間は 24 時間という画像と音声が開示される。ヨルダンのメディア担当相がカサースベ中尉が解放されれば、リシャウィ死刑囚解放の用意があると発言する。後藤さんが 29 日の日没までにリシャウィ死刑囚と私を交換する用意をしなければ、カサースベ中尉が殺害される、と語る音声をイスラム国が開示する。2 月 1 日後藤さんが殺害されたと見られる映像を映像をイスラム国が開示する。2 月 4 日、カサースベ中尉が殺害される映像を開示する（すでに 1 月に殺害されていたという）。直後にヨルダン政府はリシャウィ死刑囚の死刑を執行した。

この事件は 8500 キロの距離を超えてイスラム国がわれわれに遠い存在ではないことを実感させた。映像が感情に訴えるという意味では、イスラム国がインターネットで公開した日本人 2 人の殺害映像は、その音声と共に日本人の恐怖や怒りの感情を大きく刺激した。さらにその後のヨルダン人パイロットの焼死刑の映像とその編集の仕方による効果も大きく、イスラム教最大の侮辱である焼死刑はヨルダン人の怒りを最大限にあおることになって、結果としてシリアへの空爆を激化させることになった。イスラム国はさらにその後も、多くの人質をヨルダン人パイロットを思い起こさせる檻にいて街で行進するというデモンストレーションを行なって威嚇している。最近では、イスラム国のプロパガンダに利用されることを拒否したツイッターの経営者に対して、現実世界で危害が及ぶという脅しが行われている。

#### （5）パリ出版社襲撃とテロ事件

2015 年 1 月 7 日には、パリのイスラム過激派を刺激する内容の風刺画を出版した風刺画出版社「シャルリー・エブド」本社に、覆面をした複数の武装した犯人が襲撃し、警官 2 人や編集長、風刺漫画の担当者やコラム執筆者ら合わせて、12 人を殺害したシャルリー・エブド襲撃事件が起きた。続いて別の実行者による警官襲撃事件、パリ東端部のユダヤ人スーパー襲撃事件が起こり、3 名の犯人が射殺されて人質のうち 4 人が犠牲になった。

ジル・クベルによれば、現在のジハードは 3 世代目に当たり、第 3 世代ジハードの理論家アブサブ・スーリーは、標的を反イスラムの知識人、裏切り者、ユダヤ人として。彼らへの攻撃によって欧州社会を分断することができると考えているという（朝日新聞 2015 年 10 月 15 日）。クベルはこれに対してイスラム教徒が過激派の思想を拒否するしか解決の道がないと語る。

この事件はメディアに対するテロであり、表現の自由が暴力によって脅かされたことに対して、欧米をはじめ各地で抗議活動が巻き起こった。イスラム教の預言者ムハンマド・イブン＝

アブドゥラーフを題材とした風刺画に対しては、以前からイスラム教徒が世界各地で抗議デモを起こしていたという。これが実力での報復に結びついたのであろう。無論、言論に対して暴力で報復することは言語道断であろうが、フランス人が風刺画に対するイスラム教徒の怒りを理解できないことは、かつてのイスラム女性のスカーフ事件<sup>4</sup>にでもわかるように行き過ぎたフランスの自国文化中心主義に端を発しているように思われる。ここではメディア空間と現実空間の距離がほとんどなくなっている。

さらに2015年11月13日にはパリとサン＝ドニにおいて、銃撃戦と爆発が同時多発的に発生し、少なくとも130人が死亡した。サッカースタジアム「スタッド・ド・フランス」で、男子サッカーのフランス対ドイツ戦が行われていた午後9時ごろ、スタジアムの入り口や近隣のファストフード店で爆発音が響き、自爆テロにより4人死亡、1人が巻き込まれて死亡した。次いでパリ10区と11区の料理店やバーなど4か所の飲食店で発砲があり、多くの死者が出た。さらにイーグルス・オブ・デス・メタルのコンサートが行われていた「バタ克蘭劇場」を襲撃して、銃を乱射した後、観客を人質として立てこもった。フランス国家警察の特殊部隊が突入し、犯行グループのうち1人を射殺、2人が自爆により死亡、観客89人が死亡、多数の負傷者が出た。最近の大きなテロ事件であり、各国は相次いでイスラム国の打倒を強調し、テロ撲滅の声明を出した（朝日新聞2015年11月14-17日）。フランスや英国は米国に追随してすぐさまイスラム国に対する空爆を開始した。

イスラム国はソフト・ターゲットといわれるサッカーのフランス対ドイツ戦が行なわれているスタジアムやイーグルス・オブ・デス・メタルのコンサートが行われていた「バタ克蘭劇場」を襲撃している。これは大衆がメディアに露出することによって得られるであろう恐怖をあおることを予想したものと思われる。これに対して西欧は言論で非難するだけではなく、こちらも空爆という実力行使に出ている。メディアと現実世界でお互いに報復を繰り返すことに

よって、より悲劇を拡大している。しかもその舞台は、自文化に対する誇りが高く、他国の文化を寄せ付けけないかのようなパリであることが、西欧対イスラム国という構図をより象徴的なものとしている。欧米がイスラム世界に不義を行ってきたという思いがテロの増殖につながっていると宮田律は記す（宮田2015）。

メディア界と現実世界が再帰的に互いに影響しあって、負の循環がますます強まって働いているようである。

#### (6) 欧米のマスメディア戦略を再帰的に反映するイスラム国の

イスラム国は、かつての欧米のマス・メディアの戦略をそのまま映し出して、さらにソーシャル・メディアを用いて模倣している。アラブやアジアにおいて集合的に盛んに働いていると思われる美的再帰性、解釈学的再帰性を含めた新しいメディア再帰性を、意図している否かにかかわらず効果的に活用して、西欧中心主義を象徴するようなフランスのメディアや文化に対するイスラムの怒りを実力行使によって誇示する。

イスラム国は、メディアによって仮想世界、現実世界の区別なく、また政治的、宗教的、文化的の区別もなく、より大きく深く際限のない再帰性を働かせて浸透する。西欧の近代化によって西欧のために引いた国境線を自ら引き直して、その拡大を図ろうとしていることができるであろう。メディアと現実が重なり合い、相互に浸透することによって、負のらせんが再帰的に加速する。

## 6 結

本論では、社会の変化に伴う再帰性の変化や社会の変化と技術革新に伴うメディアの変化を追った。グローバルなメディアの変化によって、われわれの公共性の概念など、社会や政治が再帰的に問い直され、変革し続けていることを見て取った。そして、メディアがわれわれを媒介として変化し、グローバルな複雑性に創発

されて、虚構世界と現実世界の区別なく次々に変革を促していく新しいメディア再帰性を見出した。

さらに、メディアを駆使して急速に領土を形成して言ったイスラム国を事例として、メディアの再帰性について考えた。イスラム国は、ソーシャル・メディアを駆使して、欧米のマスメディアが作り上げ、広めた神話を模倣して新しいカリフ国家の神話を広めている。ソーシャル・メディアとマス・メディアの活用によって、世界中から若い戦闘員を集めることに成功し、近代西欧の引いた国境線に対して独自にイスラムの国境線を引き直して、イスラム国は国際政治の最重要課題に躍り出た。一方で斬首やメディアへの襲撃や同時多発テロによって、恐怖や怒りを巻き起こして、結果として自らへの空爆をも招いている。

今後、グローバリゼーションやイノベーションの進む情報社会において、誰でもどこからでもどのような内容でもアクセスが可能なソーシャル・メディアは、今まで以上に速く、深くわれわれの五感、感情、感動、価値、思想などを変革しつつ、社会に思いがけなく急激な変化を促すことになる。仮想空間、現実空間を含めて、さまざまな領域で、あらゆる方向へと無自覚のままに「メディア再帰性」などさまざまな再帰性が働いて、人間も社会も変化を促し促される。メディアを通した新しい再帰的近代化は、世界のあちらこちらですでに始まっているのではないのか。

われわれがメディアを通して発信するとき、そして受信するときに、あらゆる情報は、記事でも広告でも風刺画でも、その予期せぬ再帰的变化を呼び起こす可能性や世界に及ぶ影響の大きさにまで思いを馳せ、想像をめぐらせていくことが求められるのではないのか。

## 注

- 1 再帰性 reflexivity, Reflexivität という語は再帰性、反省性、自省性、反照性、リフレクシヴィティなどと翻訳されている。反省性の意味に近い個人意識から、再帰性のほうがふさわしい社

会の制度や構造の循環的反照的な性格まで広い意味をもつ。ここでは最も多く使われており意味範疇の広い「再帰性」という語に統一する。

- 2 カリフ caliph カリフとは預言者の代理人で、世俗、宗教両面におけるムスリム最高権威者の称号である。1924 年以來 90 年間のカリフの不在がイスラムでは問題であった。カリフムハンマドの後継者とみなされ、国家と宗教の一体性を擁護する。語源は後継者を意味するアラビア語である。スンニー派は初代後継者のアブー・バクル、次はウスマーン、アリーという流れを政党と考えるのがスンニー派であり、アリーが最初から後継者となるべきだと考えるのがシーア派である。初代後継者のアブー・バクル、次はウスマーン、アリーという流れを政党と考えるのがスンニー派である。イスラム教全体では 90% がスンニー派であるが、イランはシーア派が 90% を占める。バグダディのカリフとしての正当性は疑わしいが、カリフが統治、支配する国家がカリフ国家である (Napoleoni2014=2014, 高橋 2015, 中田 2015)。
- 3 ジハード Jihad アラビア語で神の正義のための戦いを意味する。大ジハードは自分との戦い、克己であり、己の欲望や誘惑との戦いを意味する。小ジハードは侵略者に対して武力でイスラムを守る戦いを意味する。イスラム教の教義ではジハードは天国への一番の近道である (Napoleoni2014=2014, 中田 2015)。
- 4 スカーフ事件 1989 年パリ郊外のクレイユ市の中学校でムスリムの女生徒 3 人が教室でスカーフを外すことを拒否したという理由で退学になった事件である。2004 年に公立学校で誇示的な宗教的標章の着用を禁止する法が公布されたが、これはエスニック化されることによって不公平を見えないものとするものであり、異なる文化的、宗教的背景を抱えた人々の要求に応えるものではないだろう (伊藤俊彦 2006)。これに対してイギリスでは個々の学校のケース・バイ・ケースの対処がなされていて、社会統合の実践で文化の多様性の承認をめぐる余地が残されている (安達 2013)。

## 参考文献

Abercrombie, N., Hil, S., Turner, B., 1988, *The*

- Penguin Dictionary of Sociology*, London: Penguin books. (=1995, 丸山哲央, 監訳編集『社会学中辞典』ミネルヴァ書房.)
- 安達智史, 2013, 『リベラル・ナショナリズムと多文化主義』勁草書房.
- 朝日新聞社, 2015, 『朝日新聞』2015年1月21日 - 2月26日, 10月20日, 11月15, 16, 17日, 12月2, 3日.
- 朝日新聞取材班, 2015, 『検証「イスラム国」人質事件』岩波書店.
- Beck, U., 1984, *Risikogesellschaft*, Frankfurt am main: Suhrkamp. (=1998, 東廉, 伊藤美登里訳『危険社会』法政大学出版局.)
- Beck, U., Giddens, A., Lash, S., 1994, *Reflexive Modernization*, Cambridge: Polity. (=1997, 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化』而立書房.)
- ウルリッヒ・ベック, 鈴木宗徳・伊藤美登里編 2011, 『リスク化する日本社会』岩波書店
- Elliott, A., 2009, "The New Individualism after the Great Global Crash". 現代社会理論研究会研究会報告原稿 (=2010, 片桐雅隆訳「グローバルな大暴落以降の新しい個人主義」『現代社会理論研究』4: 54-66.
- アンソニー・エリオット・片桐雅隆・澤井敦, 2010, 「新しい個人主義と現代日本」『現代社会理論研究』4: 67-92.
- Giddens, A., 1976, *New Rules of Sociological Method*, Cambridge: Polity. (=1987, 松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳『社会学の新しい方法基準』而立書房.)
- , 1984, *The Constitution of Society*, Cambridge: Polity. (=2015, 門田健一訳『社会の構成』勁草書房.)
- , 1990, *The Consequences of Modernity*, Cambridge: Polity. (=1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か』而立書房.)
- , 1991, *Modernity and Self-Identity*, Cambridge: Polity. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダンティと自己アイデンティティ』ハーベスト社.)
- , 1994, *Beyond Left And Right*, Cambridge: Polity. (=2002, 松尾精文・立松隆介訳『左派右派を越えて』而立書房.)
- 橋爪大三郎, 2013, 『世界は宗教で動いている』光文社.
- Hochschild, A., 1983, *The Managed Heart*, Berkeley: University of California Press. (=2000, 石川准・室伏重希訳『管理される心』世界思想社.)
- 池内恵, 2015, 『イスラム国の衝撃』文芸春秋
- 岩田貴子・塚田文子・中西真知子編, 2009, 『遊・誘・悠の商品開発』同友館.
- 伊藤俊彦, 2006, 「フランスの公立学校における「スカーフ事件」について」『東京大学哲学研究室応用倫理・哲学論集』3: 88-101.
- 伊藤陽一, 浅野智彦, 赤堀三郎, 浜日出夫, 高田義久, 栗谷佳司編, 2013『グローバル・コミュニケーション』ミネルヴァ書房.
- 岩田貴子・塚田文子・中西真知子編, 2009, 『遊・誘・悠の商品開発』同友館.
- 金井壽宏・森岡正芳・高井俊次・中西真知子編, 2009, 『語りと騙りの間』ナカニシヤ出版.
- 兼子論, 2014, 「公共圏論のパースペクティブの刷新——アレクザンダーの「市民圏」論の検討をもとに」『社会学評論』259: 360-373.
- 公文俊平, 2004, 『情報社会学序説 ラストモダンの時代を生きる』NTT出版.
- 国枝昌樹, 2015, 『イスラム国の正体』朝日新書.
- Lash, S., 1990, *Sociology of Postmodernism*, London: Routledge. (=1997, 田中義久監訳『ポストモダンの社会学』法政大学出版局.)
- , 2002, *Critique of Information*, London: Sage. (=2006, 相田敏彦訳『情報批判論』NTT出版.)
- , 2010, *Intensive Culture*, London: Sage.
- Lash, S., Urry, J., 1994, *Economies of Signs and Space*, London: Sage.
- Luhmann, N., 1990, *Essays on Self Reference*, New York: Columbia University Press. (=1996, 土方昭・大澤善信訳『自己言及性について』国文社.)
- 宮本孝二, 2000, 「社会学とリフレクシヴィティ」『ソシオロジ』138: 35-45.
- 宮田律, 2015, 『アメリカはイスラム国に勝てない』PHP新書.
- 内藤正典, 2014, 『イスラム戦争——中東崩壊と欧米の敗北』集英社.
- 中西真知子, 2007, 『再帰的近代社会』ナカニシヤ出版.

- , 2013, 「再帰性の変化と新たな展開——ラッシュの再帰性論を基軸に」『社会学評論』254: 224-239.
- , 2014, 『再帰性と市場』ミネルヴァ書房.
- 中田考, 2015, 『イスラーム 生と死と聖戦』集英社.
- Napoleoni, L., 2014, *The Islamist Phoenix; The islami State and the Redrawing the Middle East*, Seven Stories Press (=2014, 村井章子訳『イスラーム国——テロリストが国家を作る時』文芸春秋.)
- 小川(西秋)葉子, 2007, 「グローバリゼーションをめぐる二重らせんの時間」『社会学評論』228: 763-783.
- 小川(西秋)葉子・川崎賢一・佐野麻由子編著, 2010, 『グローバル化の社会学』恒星社厚生閣.
- Robertson, R. 1992, *Globalization: social Theory and Global Culture*, London: Sage (=1997, 阿部美也訳『グローバリゼーション—地球文化の社会学理論』東京大学出版会.)
- 高橋和夫, 2015, 『イスラーム国の野望』幻冬舎.
- Urry, J., 1995, *Consuming Places*, London:

- Routledge. (=2003, 吉原直樹・大澤善信監訳『場所を消費する』法政大学出版局.)
- , 2003, *Global complexity*, Cambridge: polity (=2014, 吉原直樹監訳, 伊藤義孝・板倉有紀訳『グローバルな複雑性』法政大学出版局.)
- , 2014, *Offshoring*, Cambridge: Polity
- 吉田純, 2000, 『インターネット空間の社会学』世界思想社.
- <http://Ja.wikipedia.org/>

本論文は中京大学企業研究所2012,3年度プロジェクト研究「市場と再帰性」2014,5年度プロジェクト研究「市場における再帰性」の研究成果の一部である。2015年3月日本広告学会中部関西合同部会(椋山女学園大学)における研究発表「メディアの再帰性」に加筆修正をした。関西西部会運営委員長故妹尾俊之先生を始めとして、その場で貴重なご意見やご教示をいただいたかたがたに感謝申し上げる。